様式２　【生活様式などの無形のもの】

ふくしまの森林文化調査カード

県　HP 公開（ 可・否 ）

区　　分	1.森づくり　2 森の恵み　3.森と技 4.森と暮らし　5.森の文化財　6.森の風景	
分野（ふりがな）	（分野） 伐採	（ふりがな） ばっさい
地域独特の呼び方	―	
タイトル	コビキ職人の仕事	
伝承地域	双葉郡川内村	
由　　来	（いつ、どこで、誰によって起こり、どのようにして現在まで（いつまで）伝えられたか） 山の木の伐採はコビキ職人の仕事である。かつては村内にコビキ職人がいた。	
内　　容	（内容とともに、行事・祭りの場合は実施の時期、郷土料理の場合レシピなども） 伐採する前に、伐る木の前に御神酒をあげ、山の神様を拝む。 伐採は木の倒す方向を見定め、木の倒れる側にウケホリヨキと呼ばれる薄刃の斧でウケを切る作業から始まる。ウケホリは、木の芯の近く、赤みの出るあたりまで三角口に切り込む。ウケをしっかりと規定通りに切り込まないと、木にヒビが入ったり、思わぬ方向に倒れることがある。 ウケホリが決まったらその反対側の切り口の少し上部にノコギリを入れる。大木の場合、ノコギリの切り込みにヤと呼ぶクサビを打ち込む。ヤには金属製のカナヤとカシの木で作った堅木のヤがある。 ヤを打ち込むことをヤをはるという。ヨキ(斧)の頭で打ち込む。ヨキの頭をカブラと呼ぶ。 ヤを打ち込んでウケの方向に木を少しずつ倒していくことを木を起こすという。大木となるとヤで起こしただけでは倒れずロープをかけて引き倒す場合もある。ロープがなかった時代はハヨナワという、左三つ縒りの太縄を使った。 伐り倒した木は枝うちをする。枝を切るヨキは切りヨキと呼びウケホリヨキより刃幅が広い。 昭和の初めごろまでは、山に小屋がけし、何人ものコビキ職人がマエビキノコで大木を大割りし、柱を取り、板を挽いた。	
文化財等の指定状況		
問い合せ先	(出典)『川内村史 第３巻 民俗編』　川内村教育委員会	

【継承活動を行っている方がいる場合】

個人	氏名（ふりがな）		※顔写真ありましたら、コピーか電子ファイルをご恵与願います。（貼りつけずに名前がわかるようにして同封ください。）
	性別・年齢 生年月日	男　・　女 明治・大正・昭和・平成　　年生	
	住所・電話	〒 電話	
	職　業		
団体	団体名（ふりがな）		
	代表者氏名(ふりがな)		
	団体の設立年月日	明治・大正・昭和・平成　　年　　月　　日	
	問い合せ先	電話	

【フリーフォーマット】※表面に記載した内容に関連したことを自由に記入してください。

キーワード

○　テンノウジ

　ノコギリをテンノウジと呼ぶ。長さは尺ノコ、尺三寸、尺六寸、尺八寸等あるが、普通は尺から尺三寸を使用し、尺６寸、尺８寸は大ノコである。

○　窓ノコ

　戦後にノコギリの刃が３枚に１枚、窓のように抜けているノコギリが出来た。主として大ノコである。刃の抜いてある所でノコギリクズを運び出し切り口が詰まることが無く使い易いということで伐採用に使われるようになった。

○　サヤ

　ノコギリにはサヤをかけて持ち歩くが、サヤは自分で作ることが多い。サヤに使う板はモミ板が最良とされている。厚い一枚板をタテビキノコでサヤ幅の半ば頃までひき込んで、これにノコギリをはめ込めばサヤになる。

○　柄

　柄も自分ですげるがマツが最良であった。ノコギリに合わせて手頃な太さのものに焼け火箸で穴を開け、熱いうちに打ち込む。マツはヤニが出るので、しっかりと締まってがたつかない。ホウノキなども用いられる。

○　マエビキ

　移動製材機が無かった時代には、板材は山コビキがタテビキノコで板に挽いた。この板挽きノコをマエビキと呼び３０㎝位の広幅のノコギリである。

※活動の様子が分かる資料等があればコピーを１部ご恵与ください。